

迷宮真理

a26

『思い出したくない記憶こそ頻繁に思い出される。幼年の頃に殺した虫がその最たる例だ』

しとすと降る雨を窓から眺め、僕は顔をしかめた。額から汗がにじみでる。僕は腕でそれを拭くと、ワイシャツの袖を少しまくった。汗は額だけでなく、背中や胸にもじっとりと浮かび上がる。梅雨特有のこのじめじめした陰鬱さが、僕は好きにはなれなかった。いや、はっきり言うとしたら嫌いだ。それもただ単に嫌いというわけではない。

そもそも梅雨自体が嫌いなわけではないのだ。雨が何日降ろうが、これほど気にはしない。僕が嫌いなのは今日のような天気そのものだ。

中途半端に降る雨や、たっぷりと水分を含んだ空気。それから、体にまとわりつく熱気。

そう、あの日と同じような天気が僕は嫌いなのだ。梅雨は特にそんな日が多いので、嫌でもあの日のことを思い出してしまう。

(あの日もこんな天気だった。姉が死んだあの日も)

記憶の隅に忘れられた光景は、この季節になると必ず表に顔を出してくる。そうさせるのは、決まってあの日と同じ天気だった。

背の高い雑木林の中で、大人たちの間からそれを見る過去の自分。中地半端に降っていた雨は霧雨に変わり、草に露を作った。誰の声も耳に届かない。幼い自分の目に映るのは、変わり果てた姉の姿。土気色に変色した顔にへばりつく髪。目は見開かれ、小さな虫が飛び交っていた。そして、湿った空気の中で漂う死臭。

二十年近く前の出来事は、ほぼ完全の状態に脳裏によみがえる。無意識のうちに、片手で鼻を覆っていることに気づき、僕は苦笑した。

窓からパソコンの画面に視線を戻すが、手はキーボードの上に置かれたまま、一向に動く気配を見せない。

外では雨が、しとすと降っている。

『はじまりはいつも、突然の来訪者だ。それも出かけようとする間際になって、決まって訪れる』

それは夢だ。

しかし、断続的にそれは繰り返されてきた。変化のない単調な夢。なぜ僕は、その夢を見続けるのだろうか。

気がつくと僕は走っている。それも、毎回同じ場所を、同じように。

これが夢であることを僕は知っている。知りながらも、僕は走っているのだ。

平板な道を、後ろから迫ってくるはずの何かから逃れるように、否、僕はその何かから、本当に逃げているのだ。それが何であるのかは、わからない。ただ漠然とした恐怖のみが存在し、足を動かしていく。

(このまま行ったらだめだ)

何度も見てきた夢の結末を思い出し、止まろうと試みるが、意識と身体が個別に存在していることがわかっただけで、何の変化もない。

(だめだ。止まらなくてはだめだ)

焦る必要もないのに、僕は焦った。冷や汗が、額ににじみ出る。

メビウスの輪だ。

この平板な道はメビウスの輪なのだ。何かから逃れようと必死に走っても、その何かが立ち止まっていたら、逃げているはずなのに、かえってそれに近づいてしまうのだ。もうじきあれが見えてくるはず：：

(止まれっ。頼むから止まってくれっ！)

黒い人影が視界に入り、徐々に大きくなっていく。それはぴくりとも動かないで、その場に佇んでいる。必死の思いとは裏腹に、足は止まる気配すら見せない。影は膨らみ、穴あき風船を擬して黒い霧を吐き出していく。

得体の知れぬ黒い影は、すでに目と鼻の先。

恐怖— 恐怖.....

頭を埋め尽くしていく文字。氾濫した文字は不可解な結末をもたらす。

黒い影を避けることなく、僕は突き抜けた。

そして、夢は終わりを告げる。

「君は誰だい？」

暗い路地を足の向くままに彷徨っていると、君は突如、何者かに声をかけられた。周囲を見回しても、声の発生源と思われるものはなかった。

「君は誰だい？」

声は無より湧き出た。

答えを告げるはずの声は、いくら待っても返ってこない。それもそのはず、返すべきもの君は持っていなかった。なぜなら、君はまだこの地に存在していないからだ。

「そうか。なら、君に名前を付けよう。.....そうだな、幻泡遊人(げんほうゆうと)、というのはどうだろう」

声は勝手に君に名前を付けた。そういうわけで、幻泡遊人はこの時からこの地に存在することとなった。

先程まで足下を照らしていた街灯は、気がつけばずっと後ろに歩いていた。暗がりの道は、そうやってその姿を時間の流れとともに変えていく。

「さてそれでは行くとしよう」

声の主は、ぬっ、と空間から幻泡遊人の前に現れ、見慣れぬ道を先に進んで歩きはじめる。逆らえない何かがあるのに気がついたのか、仕方なく幻泡遊人はその後が続いた。道は平板のようで、少しずつ下っていた。

「そういえば、まだ名乗ってなかったな」

さして気にもとめずに、単調とした口調が、思い出したことを言葉にかえた。前を歩いていた者は、足を止め、振り返る。その時、はじめて幻泡遊人はその前にいる者を見ることができた。

「影法師。それが私の名だ」

再び、何処へ行くのか、影法師は歩き出していく。

影法師

その名の通り、彼は誰かの影であった。質量のない映像に似た体は、見る角度によっては透けてしまう。ゆらゆらと進む影に、来訪者である幻泡遊人は先ほどからあるわだかまりをぶつけてみた。

「影法師.....さん、あの」

「……」

「あのう……僕は一体なぜ、ここにやって来たのでしょうか？」

世界はどっぴり紺に沈んでいた。所々に生える奇妙な草花が、行く先を照らしている。

「何を言っている。君が扉を突き破ってきたのだろう」

(扉?)

幻泡遊人の中で黒い霧が通り過ぎていく。

「じゃあ、あの夢は」

影法師は彼が言わんとしたことを理解したのか、ふふん、と鼻先で笑った。

空とおぼしき紺の生地は、下からしだいに、紫・ピンク・橙の順で染められていく。眠っていた世界が目覚ましだす。

「ほう、今日は金烏が昇るのが早いな」

遠くに見える建物の間から、赤と橙の入り乱れた炎の塊が、上へ上へと目指し、昇っていく。よく見るとそれは鳥の形をしていた。

世界に朝が訪れる。

『事実と真実は同一ではない。枯れすすきと幽霊がそうであるように』

あれが事故だったのか、自殺だったのか、いまなお不明のままだった。姉がなぜ死んだのかそれは彼女本人にしかわからないのだろう。それでも。それでも僕は、姉の死の真相を今も心の片隅で無意識のうちに考えていた。それだけ、彼女の死は僕にとっては大きな衝撃だった。

「あーあ、またかよ。今度は東か」

人知れずに漏れたつぶやきが僕の思考を中断させる。画面を見ると、あまり作業は進んでいなかった。どうもこの時期になるとつい姉のことを考えてしまい仕事が進まない。その原因の一端はきっとこの職場にあるのだろう。

「先輩、何か気になる記事でもあったんですか」

この部屋にあるのは二つのデスクと、作業用のテーブルだけ。もう一つのデスクの持ち主は大学の先輩だった。彼はこの学校で国語教師をしていた。たまたま図書担当になったので司書室に机があった。かつての知人と同じ職場というのも巡り合わせというものなのだろう。

「んー、ほら最近この辺りで自殺があったらろ」

「ああ、北高のですか」

「そ。んで、今度は東の生徒だとよ」

丁寧にも彼は僕にその記事を見せてくれた。案外、その記事は小さなものであった。そこには東高の女子生徒が飛び降り自殺をしたとだけ書かれていた。実際には大変なことでも文字になるとずいぶん素っ気ない。わずか数行の文と、小さな見出しが死んだ生徒を余計にちっぽけな存在にしていた。姉が死んだときもきっとこんな感じだったのだろうか。姉が死んだとき、彼女は僕が勤めている学校の生徒だった。その図書室に僕はいる。彼女が尊敬していた銀縁眼鏡の司書から、数えて三人目の司書だ。

「俺も目を配っとかないとな。クラス持ちはこういうとき、あれなんだよな」

「ご愁傷様です。でも、今でも先輩が教師っていうのが信じられませんか」

そうはいったものの実際のところ先輩はかなり教師らしかった。口では嫌そうなことを言うが、意外に生徒からも気に入られていた。あまり教師臭くないところが生徒に受け入れられたのかもしれない。

「仕方ないだろ、試験受けたら受かったんだから。お前も人ごとだと思ってるなよ、司書さん。教師にいけないことを話に来る可能性だってあるんだからな」

教師らしい口調を残して、彼は次の授業に出かけた。チャイムの響きが消えるのと同時に、辺りは元の静けさを取り戻す。風が出てきたらしく、散り行く葉が、窓を叩いた。雨はいつの間にか止んでいたが、再び降りはじめた。空は相変わらず、どんよりとした雲に支配されていた。吹きすさびはじめた風が、中庭に植えられた木をゆれ動かす。しばらくその様子を見つめていたが、僕は仕事に戻ることにした。画面に目をやると嫌でも、薄暗い図書室が目に入る。がらんとした広い空間にいくつもの書架が立ち並んでいる。そこは、確かに図書は入れ替わったであろうが、ここ数十年、変わらぬまま今に至っている。姉が僕に貸してくれた本にもこの学校名の印が押しあつたのを記憶している。たぶん探せば、それは簡単に見つかるのだろう。

(それにしても)

カタカタとキーを打ちながら僕は再び考えはじめた。次々に新しい図書が登録されていく。それに平行して、僕はどんどん過去にのめり込んでいく。

(あれは家と、家族と言えたのであろうか)

その問いの愚かさに、軽く息を吐く。あれが家族であることを僕は懸命に否定した。幼年時代に幸福がなかった、ということそれは嘘になる。幸福なときは確かにあった。しかし、それ以上に、氷河期の時代が長くあったのも、否定できない事実だった。

当時、僕の家は皆、バラバラだった。母と二人目の父の間には、小さな溝ができはじめていたし、その溝より深いものが、彼らと僕たちの間に存在していた。

二人目の父は、母がそうであるようによく酒を飲む人だった。二人の出会いもどこかの酒場だったはずだ。父は酒がないと生きていけない人で、よく家の金を持ち出していた。それでも足りないときは、平気で僕や姉の小遣いに手を出した。母も母で、男がいないと生きていけない人だった。今思うと、母は母ではなく一人の女としてしか生きられない人だったのかもしれない。父が仕事で家を空けると、母は決まって男の飲み友達を連れてきた。その人と一日過ごすこともあった。両親が互いのことで喧嘩をするのもしょっちゅうだった。

姉はよくあんな父でごめんね、といった。だから僕も、あんな母でごめんねと答えて、二人で笑ったのを覚えている。あの家で唯一くつろげたのは血のつながらない姉と一緒にいるときだけだった。だがそれも、死という見えない力で完膚無きまでに破壊されたのだ。それは当時の自分には、あまりにも不当すぎる出来事ではなかった。それなのに、姉は何も言わず静かに消えていった。たった一言の救いも残さずに……。

「僕は何を望んでいたのだろうか？……いや、望んでいるのだろうか」

心の声はそのまま声となり、宙に散った。

(そうだ、僕は求めているのだ)

そう意識した途端、ぞわっとどこかで冷たいものがあふれだした。

(では一体何を？ その死の真相をか。それとも、裏切ったことへの弁明をか)

擦れた記憶に希求するには、無謀すぎる問いだった。だが、理性のその判断を、基となる感情は無理に押しつけ、手に入れることのできないその答えを、なお、希求し続けた。

しかし、その感情が追い求めているものが何なのか、実のところ僕自身にもわからなかった。

風の音の中に雷鳴がとどろく。

嵐が来る。

「それで君はここに落ちてきたのか」

「えっ？」

靄のかかった幻泡遊人のその意識に、興味深げな黒い声が響き渡った。ほぼ同時に、影法師が銀のラッパを吹き鳴らす。そのメロディは遙か下に広がる家並みに降り注ぐ。彼らは天に向かってそびえ立つ、巨大な建物の頂上にいた。

いがのある円柱状の不思議な建物。辺りを見回しても上り下りをするための階段もエレベーターもない。影法師は、頂上付近の突出した棒の先端に腰を下ろし、軽快に音を立てている。幻泡遊人は、頂上に立ちつくしたまま、不思議そうに、浮き上がった世界を見下ろした。目覚めたばかりのような不透明な意識に、落雷が鳴り響き、立ちこめる靄を吹き飛ばした。見ると眼下には先ほどまではなかった黒雲が存在していた。

(僕たちはどうやってここまで来たのだろうか)

地上は常に変動している。さっきあった黒雲はすでにはない。一瞬でも目を離せば、今まであったはずの景色はどこかに消え、別のもの取ってかわった。定まることのない奇妙な世界。

「歩いて来たに決まっている。君は、境界を行き来していたから、認識がないかも知れないが」

金烏が放つ煌々とした光が、影法師の体を半分ほど透かしていた。眉をひそめる幻泡遊人を、

見えない笑いが眺めた。

「ここでは『確か』という単語は意味をなさない。全てが定まっていないのだからね。一言で言うなら『混沌』といったところだろう」

ますます混乱する幻泡遊人に、銀のラッパの乾いた音がせせら笑った。音は適当につながれ、中空に消えていく。

「追いかけても、見つかるとは限らない」

「先生？」

呼びかけられて、とっさに顔を上げると、一人の女子生徒がいた。ショートヘアのその生徒は、図書委員長だった。一世代昔の高校生のように膝下丈のスカートが特徴的で、他の女子がしているような化粧も彼女には無縁だった。司書の僕を先生と呼ぶのは、その方が楽だからだと何かの折りに聞いた気がする。

「何ですか？ 追いかけてもって。……あ、わかった、誰かの詩でしょ」

「あ、ああ、そうなんだ。何かふと思い出してね」

どうやら僕は知らずのうちに何かを口にしていたらしい。委員長の勘違いを僕はそのまま利用した。気がつけばもうじき閉館時間だった。ガラス窓で区切られた図書室を見ると他の委員の生徒がせわしなく閉館準備をしている。彼女は一人、僕が登録した本にカバーと貸し出し用のカードをつけて、新刊として図書室にだす準備をしていた。

「うーん。追いかけても……か。わからないなあ。それって外国の人の作品ですか？」

委員長はうなりながら、記憶の中で過去に読んだ作品を検索しているようだった。彼女はこの学校一の読書家として有名だった。

「わからないな。本当にちょっと思い出したただけだから」

「あー、そう言うのってありますよね」

作業に使ったものを片づけながら、委員長は次に入る予定の図書を物色している。気に入ったものがあれば、役得とばかりに予約を入れ、一番に借りていった。そこには興味があるものがなかったのか、段ボールのふたを開け、今日、本屋から届いたものまで手に取っていた。

「そういえば、先生。最近、借りる本なんですけど、みんな同じ人が借りているんですよ。わたしと学年もクラスも、出席番号まで同じ人なんです。奇遇ですよ。確か、名前は」

外では、まだ風がごうごうと吹いていた。閉館時刻を迎えても図書室に人が多いのは、きっとバスを待っているからだろう。

「そうだ、中川十(とお)って言う人、知っていますか？」

バキキッ

その声と音はほぼ同時だった。きゃあ、と図書室がにわかに騒がしくなる。見ると中庭に植えられた若木が、風に負け、その幹の途中から折れ曲がっていた。折れた幹の先は、獲物を待ちかまえる銜のように、微動だにせず曇天の空を睨んでいる。はっと僕は息をのんだ。なぜだかはわからない。わからないが、その光景をどこかで見た、そんな気がしてならなかった。

「皆さーん。落ち着いてくださーい。もうじきバスが来ますよ」

興奮する生徒の間を、委員長は他の委員と一緒に、バスの時刻を知らせに走る。その成果かぞろぞろと生徒たちは図書室を後にする。

「中川十」

窓に手をつき僕は折れた木を見つめた。遠くで女子特有の甲高い声が聞こえる。

「追いかけても、見つかるとは限らない」

「それが一体どうしたんですか」

影法師の長い沈黙にしびれを切らし、幻泡遊人は口を開いた。

「何がだい？」

棒の先端に立ち上がる影法師。ゆらゆらと、無と有が交換され、より映像のように彼は見えた。

「さっきあなたが言ったことです。追いかけても、見つかるとは限らないって。それで何がいいたいのかって、聞いているんですよ」

少々苛立ちのこもった声に、影法師は首をすくめた。やれやれと、仕草は語る。

「なんだ、そのことか。そんなことを聞かれても答えられるわけがないだろう。そう言ったのは私ではなく、君なのだから」

どこまでも真面目な、それでいて不可解な言葉。その言葉に嘘のはいる余地などどこにもない。「君はまだこの世界を理解していない。故に混乱する。言わなかったか。『確か』という言葉は意味をなさない」と

幻泡遊人が頷く必要はなかった。彼がそうするだけの時間を、影法師が与えなかったからだ。「ここは意識の最下層。君たちの言うところの潜在意識というものだろう。世界が混沌なのは、いや、定まるところがないのは、といった方がわかりやすいかな。まあ、とにかく、この世界が変化し続けるのは、ここが人間の不確定な部分だからなのさ」

遙か遠くでラッパが鳴った。あの銀のラッパの音色だ。だが、その音色は先ほど聞いたものとは異なり、どちらかといえば雷鳴に近い音だった。

「私は君の底に転がる言葉を拾っただけだ。それに答えがあるなら、それを知っているのは、私ではなく、君自身だろう」

それは理解しがたい事実だった。しかし、それが紛れもない真実のように、幻泡遊人には思えた。

(やはり確かなものは存在しないのかもしれない)

歩き出した影法師の後に、彼も続く。誰かに呼ばれたような気がして振り返る。彼らが通って来た道は、真黒の中に消えていた。先に行くか、戻るか、彼は一瞬だけ迷うと、影法師の後を追いかけた。

『混沌ははじまりだが、はじまりが混沌なのではない』

「中川十」

書架の林の中で、僕は見つけたその文字を人差し指でなすった。シャープペンシルとは違う、鉛筆の太い線が、時代の流れを実感させる。委員長にいわれるまで、決して触れなかったものを僕ははじめて手に取った。読書家の姉が残したものは、この図書室の林に隠されたいくつもの本の中にあった。そう、委員長がいていたように、彼女の名が残された本はまだ何冊も残っていた。僕が進めている電子化に全てが変わるまで、まだ二、三年はかかるだろう。それまではこの図書室は姉の思い出の宝庫だった。

ジリリリリリリ

終業を告げるベルに、僕は顔を上げると、本を戻し、司書室に戻る。あと十分もすれば、昼休みの騒々しさがここにも押し寄せてくる。

部屋に戻ると、廊下に面したもう一つのドアが開いた。早めに授業を終えたのか、先輩がけだるそうに入ってきた。

「はあ、やってらんねえ」

「何かあったんですか」

別にそうしなくても良かったのだが、僕は備え付けられたシンクで二人分のコーヒーを入れた。手渡すと彼はいつものように「悪いな」という。彼は質問に答えずに、ぐいとそれを飲んだ。まるで酒をあおるような飲み方に、僕は眉を寄せたが、深く問いつめることはしなかった。例え聞かされたとしても、受け止めるだけの余裕が僕にはないのだ。

「クラスの一人がよ」

先輩の後ろ、ガラスの向こうの図書室に、委員長が昼の仕事のため現れる。いつもなら司書室で食事をとるのに、今日はそうではなかった。手際よく、カウンター業務をこなしていく。

「あの東の事件以来、学校に来ないんだよな」

ため息と共に置かれたカップに、僕は視線を向けた。先輩は背を丸め、いつもの自信をどこにやったのか、別人のように落ち込んでいた。よほどその生徒のことが気がかりなのだろう。生徒一人によくそこまで、と思ったが僕はその思いを飲み込んだ。こういうどこか冷めた所が、人との関わりを避けさせるのだろう。気付かれぬように自嘲すると、切ってあったパソコンを立ち上げる。

「あの事件で、三日前でしたっけ」

「ああ、四日かな。欠席が三回だから。他の生徒から聞いた話だと、亡くなったのは中学時代の親友らしい」

親友……縁のない言葉に僕はあいまいに頷いた。決して友達が少なかったわけではないが、うちとけた、というのが苦手だった。親友を得るには、どうしても姉の死を語らなくてはいけないという強迫観念に大学を卒業するまで縛られていた。今もきっとそうなのだろう。

「先生、新刊、出せるのありますか」

ノックもなしに開いたドアから、元気のいい声がしんみりした司書室の空気を破った。カウンターを他の生徒に任せた委員長が、ひょっこりと顔を出している。僕が返事をする前に、彼女はめざとく受け入れ済みの本を見つけると、「失礼しまーす」と一応断って入ってきた。

「あれ、珍しい。先生が元気がないなんて」

一〇冊ぐらいの本を作業用の机に移すと、委員長は今気がついたように先輩を見た。作業道具

をだして本にカバーを張りだす彼女に、「悪かったな」と先輩は苦笑する。

「委員長はいつも元気だな」

「えー、それは先生じゃないですか。あたしにだって悩み事の一つぐらいありますよ」

「俺も今悩んでるぞ」

そうでした、と笑う委員長に、つられて一緒に笑う先輩。僕も笑みを張り付けるが、すぐに画面を眺めた。委員長と先輩はとぼけながらも楽しそうに会話を続ける。それをBGMに、指はキーボードの上で華麗な舞を見せた。いつの間にか仕事に集中していたらしく、気がついたら予鈴の鐘が鳴っていた。

「それじゃ、放課後また来ます。失礼しました」

そんないつもの台詞を残し、授業に戻る委員長に慌てて、返事を送ろうとする僕に豪快な笑いが襲った。少し強めに背中を叩かれる。

「おいおい、なに休み時間まで真面目に仕事してんだよ。気になってこっちまで休めないだろ」

向かいの机ではなく、先程まで委員長が座っていた椅子に先輩は座り直すと、軽く伸びをする。ついでに肩も回しはじめるが、その表情は先程までのふざけたものとは違い、真剣な眼差しでどこか遠くを見つめていた。委員長が来る前に聞いた話をまだ気にしているのだろうか。冷めてまずくなったコーヒーを口に含むと、少しだけ眉をよせて飲み干した。

「家庭訪問したんですか」

「あ？」

口を開けたままこちらを見る目は、おどけを装っている割には真剣すぎた。自分のカップを手にして立ち上がると、先輩の分のも持ってシンクに向かう。入れるのも片づけるのも僕がするのがいつの間にか当たり前になっていた。それが司書と教師の差なのか、後輩と先輩の差なのか、果ては両方なのか、僕にはわからなかった。ただいつの間にかそうになっていた。

「休んでいる生徒のですよ」

「ああ。……いや、まだだ。親には電話したんだがな。部屋に閉じこもったままなんだとよ」

わずかに伸びた顎髭を右手でさする先輩は、本当に困っている様子で椅子に背を預けた。

親友が死んで、部屋に閉じこもる。僕にはその感覚がまるでわからなかった。思い返せば、姉が亡くなった後、僕は毎日のように許されるだけの時間をその現場近くで過ごしたのだ。もちろん家に休まる場所がないというのも事実であったが、そこに行けば姉が帰ってくるのではないのか、そんな淡い期待を抱いていたのかも知れない。

「なんかあったのかな。死ぬ直前に喧嘩したとか。忘れられない理由が。どう思う」

そう振られたところで本鈴が鳴る。先輩はくしゃくしゃと髪を片手でかき回し、デスクの上の教科書を小脇にはさむと、行って来るかと授業に出ていった。

取り残された僕は、しばらく立ったままだった。

(忘れられないのは、何かあったから。……姉のことが忘れられないのもそうなのか。僕と彼女の間に関わったのだろうか。でも、一体何が?)

静かになった司書室にはパソコンの稼働音だけが不気味に鳴り響いている。

影法師と幻泡遊人は板塀に挟まれた道を、速くも遅くもない速度で歩いていた。

「一つ聞いてもいいですか？」

三歩半ほど先を誘導するかのようによく歩く影法師に声をかけた。

ゆらゆらと進む映像の返答はない。時々、角度のせいか影法師は透けて行く手が見えた。そう幻泡遊人は思っていたのだが、よく見るとそれは前ではなく、通り過ぎてきた道の光景であった

。「あの、何故僕はここに来てしまったのでしょうか？」

前にした質問をもう一度聞く。的確な答えを、影法師が持っている気がした。長い沈黙の末、声は帰ってきた。

「残念だな。君の聞きたいことは知っていると思うが、教えることはできない」

いくら歩いても、板塀に囲まれた道に変化はない。

(もし空き缶を置き歩いていたら、それがいつの間にか前にあったりするのだろうか)

そう思わせるような単調すぎるほど単調な道だった。

「どうしてですか」

「どうして？ 簡単なことさ。君の中にまだその言葉がないからさ。ないものをあるとは言えないからね」

「.....そうですか」

気落ちした風な幻泡遊人に、今度は影法師が尋ねた。振り向きもせずに、自分の質問にさえ気にしない素振りを見せながら、彼はこう問うた。

「しすこん、とは何だい？」

あまりにも突拍子もない問いに、二十秒あまり、幻泡遊人は返事をするのに時間を要した。

「シスコンって、シスターコンプレックスのことですか」

「さあ、知らないね。それに知っても仕方がなさそうだし。それに、私が聞きたいのは、君がそのしすたあ何とかってやつなのかってことだ」

影法師は足を止め、踵を返した。行き止まりである。彼の言葉と行動の二重の驚きに、幻泡遊人は襲われた。

「な何で僕が、シスコンなんですか！」

「何故といわれてもね。その単語が転がってきたのだから仕方があるまい。それと、君は少し姉というものに固執しすぎだ。いや、その死についてかな」

さっと幻泡遊人の顔色は変わった。訝しげな目が、影法師を捕らえた。にいと、彼は笑った。否、彼が笑ったのではない。彼の後ろで誰かが笑ったのだ。

「どうしてそのことを？」

幻泡遊人は思った。目の前にいる影法師と名乗る者（彼が人間なのかは不明）が誰かに似ている、と。それはあまり好感の持てるものではなかったような気もした。

「私はただの影。波長さえ合えば、誰の投影にでもなれるらしい。普通の住人は、皆、誰かの投影なんだがね」

「とう...え.....い？」

その響きはどこかもの悲しかった。

「そう投影だ。.....まあ、いわゆる心の住人、内なる存在だな」

影法師の声は何故か明るかった。まるで、つくられた明るさ、である。

(ああ、あの影だ)

幻泡遊人は確信した。影法師はあの黒い影に似ているのだと。

それは夢だ。

しかし、断続的にそれは繰り返されてきた。変化のない単調な夢。

なぜ、この夢を見るのか僕は知っている。

気がつくとも僕は走っている。それも、毎回同じ場所を、同じように。

これが夢であることを僕は知っている。知りながらも、僕は走っているのだ。

平板な道を、後ろから迫ってくるはずの何かから逃れるように、否、僕はその何かから、本当に逃げているのだ。それが何であるのかは、わからない。ただ漠然とした恐怖のみが存在し、足を動かしていく。

(このまま行ったらだめだ)

何度も見てきた夢の結末を思い出し、止まろうと試みるが、意識と身体が個別に存在していることがわかっただけで、何の変化もない。

(だめだ。止まらなくてはだめだ。止まってくれ)

願いもむなしく僕はまた黒い靄に飲み込まれる。

そして、夢が終わる。

世界と世界の境目。有と無の接点。見えないラインで区切られたそこは、限りなく広く、狭い空間であった。

幻泡遊人は、一人でそこに佇んでいた。

透明の壁の向こうに見えるのは螺旋状の道。あたかもそれはメビウスの輪のようである。そこを必死になって走る、人間がいた。存在する前の幻泡遊人である。

(あの黒い靄こそが扉だったんだ)

そうでなくてはおかしい。推察が正しいのかを調べる手だてはなかったが、幻泡遊人はそれが間違っているとも思わなかった。

影法師がどこへ行ってしまったのか。あるいは自分が勝手にここに来たのか。どちらでも構わなかったが、一人になったことに、彼は少しだけ不安を覚えた。

恐怖に満たされながらも、扉を突き破って行く過去の自分。疑問もないまま彼は、下へ、下へ、この不可思議な意識の最下層へと近づいていく。磁石に引きつけられるように、どんどん、どんどん、彼は下っていく。自分が下っていくという意識さえ持たずに。

「あっ！」

幻泡遊人は気がついた。自分が目にしているのは明らかに自分自身であったが、それはある意味で、今の自分ではなかった。彼が見たのは、姉が死んだ、その当時の自分の姿。もっと正確に表記するなら、下っていくごとに幻泡遊人は過去のその一点へ、それが当然の如く戻っていたのだ。

ごくっ

唾を飲みこむその音が、とても大きく聞こえた。おそろおそろ己を見直してみる。不意に、背筋に冷や汗が流れた。

(以前にもこんなことがあったような)

手のひらをみすえたまま、幻泡遊人の時間はその場に立ち止まった。先程の音が頭にこびりつき、離れようとしなかった。唾を飲む行為など、誰でもやっていることではないか。そう己に向かって囁いてみるが、渦を巻く不安が消え去ることはなかった。

(何か大切なことを忘れているのかもしれない)

辺りはすでに何もなくなっていた。黒い空間のみが、悠然と彼を内在していた。

(それを見つけるためにこの不思議な世界に迷い込んだのだろう。 :: : それにしても、何で今頃になって)

見えない壁に背を向け、彼は歩き出していた。

黙々と、幻泡遊人は歩き続ける。

「時期なんてものは対して関係ないさ。海に沈んだ船が、朽ちてもそこにあるように、無意識のわだかまりが自然消滅することなどありえないのだから」

公園の滑り台の上から、影法師は幻泡遊人を見下ろしていた。顔を上げると、戻ってきたかい、と影法師が銀のラッパを吹き鳴らした。

旋律は静かに、そして突然明るくなる。

その音色はラッパのそれではなく、まるまる一つのオーケストラのものだった。

「ドヴォルザーク。……好きなんですか？」

音の深みをバックに、幻泡遊人は自分のいる公園を見渡ししながら、尋ねていた。

「交響曲第九番ホ短調作品九五『新世界より』。どうだろう。本体の好みなど、私の関与するところではないからな。けど、こうやって出てくるんだから嫌いではないようだが。そういう君こそどうなんだい？」

ざわざわと木々が揺らぎ、遅れて風がやってきた。

「別に好きでも嫌いでもないです」

ラッパを弄びながら、不意に、鮮やかな動作で幻泡遊人の傍らに影は落ちた。着地と同時に放り上げたラッパは鳥となり、どこかへ飛び去っていく。ほう、と幻泡遊人はその見事さにため息をついた。

「曲のことを聞いたのではないのだが。まあ、私の聞き方が悪かったのは認めるがね」

消えていく鳥を共に眺めながら、独白めいた台詞を影法師は宙に投げた。

「改めて聞こう。君は時期というものが重要だと思うかい？ ああ、もちろんこの世界においてのことだが」

サワサワと木の葉が降りしきる。

難しげに考え込む幻泡遊人の傍らで、影法師は有名な旋律を口ずさんだ。

『遠き山に日は落ちて』

やはりドヴォルザークのあの曲であった。

「答えは否だ。それは何故か。ここでは時間の観念もいい加減だからさ」

「それはつまり」

わかったような、わからないようなあいまいな口調は彼の心理を正確に反映していた。

風もないのに、緑の葉は次々と落ちてくる。

「どんな人間も、等しくこの世界を内在している。つまり、ここは時間が動き出す前の不確定なところ。全てのはじまりだ。たとえるなら、そう、形作られる前の粘土だろう。それが何になるのか、なれるのか。塊のままではわからない。それに手を加えることではじめてその何かが見えてくる。ここもそんな世界なのさ」

問いと答えは矛盾していたが、そんなことはどうでもいように幻泡遊人には思えた。

(心の基となる混沌とした世界。そこから紡ぎだしたものこそが僕らの精神なのかも知れない)

宙を舞っていた鳥たちは、一斉に影法師の手の中に帰っていく。銀のラッパは静かにその身に輝きをたたえていた。

曲は勝手に鳴りはじめる。

「そうだ。あまり境界を行き来するのは避けた方がいい。混乱してどちらにも戻れなくなるのがおちだからな」

はらはらと降る葉は、ゆっくりと粒に姿を変えていき、やがて本当の雨となった。

しとすと雨が降る。

青ざめた幻泡遊人を一瞥し、わずかだが影法師は笑った。自嘲じみた笑みであったが。
(真実は確実に君の中にある。君はそれを見ようとしなが、それに気がつかなければ、ここから出ることはできまい)

曲は徐々に高まっていく。

第一楽章の新鮮で荒々しい息吹。「新鮮」や「新しい」という言葉は、ものの最後になってはじめて存在する。確立した自己を切り捨て、真実に洗練された自己を確立すること。新たな自己の確立。それこそがまさに、『新世界』

『自己を知ること。それは内在する人物に出会うことである。そして、それを見つけるのは常に他人である』

東高校の飛び降り自殺の記事から一週間が経った。デスクの上に広げた新聞には、隣の市にある私立高校の生徒が同じように飛び降りた事件が載っていた。地域は違うが、その生徒が住んでいるのが、この学校があるのと同じ市だった。学校関係者は、次は自分の生徒ではないかと、戦々恐々とし、いつも以上に厳しいまなざしを生徒に向けていた。今日の臨時会議もその話だった。

「最近、物騒ですよ。受験の時期でもないのに」

いつもと変わらずに、作業台でせっせとカバーかけに精を出していた委員長は、ふと手を止めるとそんなことを口にした。生徒の間でも、飛び降り事件の話は話題になっているらしい。クラスで聞き込んだことを、かいつまんで話してくれた。

「そういえば、今日はいないんですか」

主のいないデスクを指さし、ため息混じりに聞いてくる。先輩の席はきれいに片づいていた。休み続ける生徒の所へ顔を出しに行くといつて、早めに帰った先輩の姿がちらっと脳裏をかすめた。一見すると体育教師かと間違われそうな見事な体躯をしている先輩も、その生徒のせいですこしやつれた感じがした。

珍しく雨が止んでいる中庭を僕は見た。何があるわけでもなかった。強いていえば、数日前に折れた木が気になると言ったところだろう。危ないので簡単にロープで囲ってある。地面から生えた自然の槍は、僕の席からちょうどよく見えた。用務員が一人、せっせと痛んだ庭を片づけている。

「……で、なんだか、近頃、痩せた気がするんですよ。先生はどう思います？」

「んー」

先輩のことを気にする委員長は、もしかしたら彼にほのかな恋心を抱いているのかも知れない。そんな思いが浮かび、自然に頬が緩んだ。僕が姉に抱いた淡い想いと委員長のそれはきっと同じなのだろう。決して叶わぬ想いだ。委員長も先輩の薬指にはめられた指輪には気付いているはずだ。

「そうだね。でも、よく見てないと多分わからないと思うよ。元気がありあまったような人だから」

「見てますよ。ほぼ毎日、ここで会っていますから」

確かに、委員長は一年生の時から、二年生になった今日まで、せっせと毎日、委員会活動に勤しんでいた。入学当初から、多読で有名な子だったので、本当に本が好きなんだなと思っていたが、もしかしたら毎日来るのには別の理由もあるのかも知れない。それがいつからなのかはわからないが。

話しながら、作業を進める横顔は、いつもよりも輝いていた。きっと久々にでた太陽のせいではないのは間違いない。

「やっぱり、原因はずっと休んでる生徒のせいなんでしょうね」

それほど流行や噂に詳しい方ではない彼女から、上級生の欠席が話題にでるとは思わず、素直に驚いてしまった。僕の表情を見て、やっぱり、と委員長はつぶやいた。無意識に口をとがらせているあたりが、その生徒に嫉妬めいた感情を持っていると思わせる。

「そんなことも噂になっているの」

「いいえ、違いますよ」

一通り、図書の装備を終えた委員長は、散らかった机を片づけはじめる。

「その人、図書室の本を借りたまま一カ月ぐらい延滞しているんですよ。催促しても無理なんで。昨日、クラスにいったら」

「ずっと休んでるって教えてもらったんだ」

頷く委員長に、僕はお菓子の入った缶を差し出した。作業が終わると僕たちはこうして秘密のお茶会をするのが日課だった。もちろんこれは図書委員なら誰でも参加できるものだ。ただ、あまり熱心に活動する人は委員長以外いなかったの、いつも二人でやっていることになる。

「今日は、先生も機嫌がいいんですね。間違っていたなら訂正しますが、この時期になると先生って鬱ぎ込みますよね。梅雨、嫌いなんですね」

私もですと、お菓子をほおぼる委員長に、僕は言葉を失った。この時期、気分がめいるのは自分自身自覚している。だが、外にはわからないようにしてきたつもりが、こうもたやすく見破られていたとは思わなかった。その事実には愕然としていると、雷が鳴った。

見上げた空に黒雲が広がっていく。

「また雨か」

庭の手入れをしていた用務員のその声にあわせ、ぼつりと雨が落ちてきた。

階段だった。

わたしは階段をのぼっていた。終点の見えないそれを黙々とわたしはのぼっている。

その先に何があるのか、わたしは知らない。それが幸なのか、不幸なのか、それさえもわからないのだ。それでも、わたしはその階段をのぼらなくてははいけなかった。誰かそうしろと言ったわけではない。そうしようと決めたのは、己の中で息をひそめて棲息するエゴであったのだから。

目の前に延々と続く石積みの群れ。どこまで、どこまでもそれは途切れることなく続いている。それと同じくらいの長さが、わたしの後ろにも続いているのだろう。その長さが、わたしが生きてきた明確な証なのである。背後に下るその灰色が、忘れられた石模様が、ただ一つの救いでもあった。

振り向かなかった。今までの長いとも言える年月の間、一度としてわたしは振り向かなかった。振り向くことは簡単にできただろう。立ち止まることも。けれど、あえてわたしはそれをしようとしなかった。

臆病だったのだ。

振り返らなかつたのは、未来のみで生きられるからではない。そんなに強い人間ではない。

怖かったのだ。そう、わたしは怖いのだ。

振り向くことも、立ち止まることも簡単にできてしまうから、余計に恐ろしいのだ。過去に捕らわれ、先に進めなくなるのが、諦めてしまうことが、いや、不満を口ずさむ自己を封じて満足を装う自分と対面することが、わたしは怖くてしかたがなかったのだ。

わたしはのぼっている。メビウスの輪ともいえる階段を前ばかり見て、立ち止まることもなく、一步、一步、確実に前に踏み出していく。のぼりながら徐々にわかってきた。答えは常に後ろにあることに。誤解なく言えば、恐怖の向こうにそれはあるのだ。そうわたしには思えてならなかった。だが、恐怖から逃げ続けるわたしには、それが本当かどうか確かめるすべがなかった。

わたしは振り向かない。いや、振り向けない。この延々と続く階段を、これからもずっとのぼ

り続けるのだろう。

なぜなら

わたしは臆病だからである。

階段はどこまでも続いている。

どこまでも……永遠という言葉がある限り。

オレンジ色の薄暗い証明の下、影法師は水面に浮かぶ映像を飲み干した。幻泡遊人は大事そうにコップを抱え、水面を見つめている。

ちちち ち ち ちちちち ち ちち……

壁中にかかった時計は、どれも不規則に、時を刻んでいる。

「あの人は今ものぼり続けているんですか」

水中に落ちた言葉は、シュワワワと気泡になり、空中に飛び立つ。

「ああ、彼はここには来られないからね。きっと今ものぼっているのだろう」

(無と有の境をぐるぐるとね)

「来られないって、その……」

口ごもる幻泡遊人に、肩で大きく影法師は息をついた。

「君はどうしていつも、そう申し訳なさそうに尋ねるんだい。知らないことを知っている奴に聞くのは至極当然のことだと思うが、向こうの世界ではそうではないのか」

恥ずかしげに俯く幻泡遊人。手にしたコップから、いつの間にそこに入ったのかチャプンと小さな魚が飛び跳ねた。赤い、指ほどの小さな魚。それは水面より、下へ下へと泳いでいく。底で待っている鉛の銚を知ることもなく。底に溢れる光を求めて……

息をひそめた木々の微かな息吹の中を、異質な音が走り抜ける。

短くとぎすまされた人の声。

大きく広げられた枝より落下した影は、何も知らずに重力に従っていく。下で待つのは折れた細い幹。それはあたかも突き立てられた槍のようであった。影は空を掻いたが、己から、その切っ先の餌食となった。

黒より吐き出される赤。

生ぬるいそれは急速に広がっていく。陸に上がった魚はぴくぴくと跳ね、ゼンマイが切れたのかやがて動かなくなる。

再び訪れた沈黙。

ぱらぱらと、木々の皮が自然に反して落ちていく。枝の上には小さな影が息をひそめて存在していた。

一筋の赤が、少量だが水面に浮いてくる。かたかたと手は震え、水面を波立たせた。浮き上がってくる魚の血も波に乱され一面に薄く広がった。影法師は窓の外で階段をのぼり続けるでっぴりとした男を眺め、口元をわずかにつり上げた。

「なぜ臆病者がこの世界に来られないのか、君が問いたいのはそのことだろう」

意識とは無関係に震える手を抑えながら、幻泡遊人は頷いた。水の入ったコップはいつの間にか手から滑り落ち、床に割れ散っていた。

「そんなことは簡単なことだ。彼は言ってなかったか？ 自分は臆病者だと。迫り来る恐怖に背を向け、逃げ回っているのだと。恐怖。そう恐怖こそがこの世界の扉。君のように恐怖を経験した者でなければ、この世界には来られないのだよ」

手は次第に大きくわななきはじめ、幻泡遊人にはどうすることもできなかった。ただ手と影法

師を互いに見るしかなかった。理由のわからないまま、手は勝手に揺れ続ける。

「しかし、ここに墮ちた者たちが、向こうの、彼らのあるべき世界に帰ることはほとんど無に等しい。ま、他力本願にかまけてそれを解決しようとしなから、当然なんだがね」

それにしても、と影法師は幻泡遊人を見やる。有と無が作りだす奇怪な体の中から、湿った風が漂ってくる。水気を十分に含んだ梅雨のあの空気だ。

(君はその恐怖を自覚すらしていない。仮に自覚をしていたとしてもその根元を知らない)

『無より有は生じない。もし生じるとしたら、それは見えない何かがそこにあるのだ』

窓の外はすでに嵐が到来していた。

昼休みから降り始めた雨はいつもの様相をどこにやったのか、わずか数時間で嵐へと変貌していた。鬱陶しげに降り出した雨は大粒の、土砂降りという形容に相応しいものになり、荒れくれ者の風を伴い窓という窓を激しく叩いていた。中庭ではこの前、折れた細い木が、ロープで固定されながらも痛いぐらいにうねっている。よく見ると固定していたロープは金具ごと大地から掘り起こされ宙に舞っていた。だが、それも外の世界だけのことだ。板塀で八方を仕切られたこの空間は、外の騒々しさとは対照的に、何も変わらず静かであった。今日も先輩は家庭訪問でいない。

この嵐のせいか図書室の利用者は少ない。今日の当番だった生徒も電車が止まるのを恐れ、さっさと帰ってしまった。数名の帰りそびれた利用者を相手に、カウンターに座る委員長も退屈そうに口に手を当てている。

梅雨に来る嵐。それはまるっきり時季はずれで、不思議な違和感を所持していた。

(時期はずれの嵐……か)

椅子から立ち上がり窓辺に立ち寄る。遠くで図書室の引き戸が開いた音がした。誰かがまた帰る決意をしたのだろう。

一向に弱まる気配を見せない暴風雨は、我が物顔で外の世界を荒らし回っていた。細い枝がさらに折れそうなほどにまでうねっている。風も雨も容赦ない。

薄暗い空に一筋の光が走る。それは決して救いの光ではない。数秒遅れて雷鳴が鳴り響く。それと同時に、人口の光は姿を消した。図書室で短い悲鳴が上がる。

ちっと軽く僕は舌打ちした。パソコンの方を一瞥するが、すでに手遅れなのは分かり切っていたので近寄ることはしなかった。ドアの開く気配がし、ぱっと一条の光がさす。懐中電灯を手にした委員長が、ほっと息をついていた。手にした光が揺れ、作業台に置かれた金魚鉢を浮かび上がらせる。自然に目は光を追っていた。

(！)

死んでいた。それは増えすぎたからと生物の助手が置いていったものだが、波のない静かな水面に腹を出して、漂うでもなくそこにそれはいた。やけに赤い、赤すぎる金魚。委員長は慌ててそれに近づき、何かつぶやいている。

(別に驚くこともない。きっと寿命だったんだ)

そういい聞かせる僕は、かなりうろたえていた。

ぱちぱちと明滅し、光が戻った。

「よかったあ」

心底安心した委員長の声にも僕は何も反応できなかった。死んでしまった金魚のことが頭を埋め尽くしていた。何とも言えない不安が生じ、僕はごくりと唾を飲んだ。嫌な汗が背中を流れる。

「あーっ！　そういえば」

いきなりの素っ頓狂な声に、僕はようやく我に戻った。開け放たれたドアを急いで往復する委員長。何があったのか、僕も一、二歩彼女の方に近づいた。図書室を見ると利用者はすでにいなかった。気がつかないうちに委員長は閉館準備をはじめていたらしい。

「これ、戻ってきたんです」

顔の前に差し出された本を指さし、委員長はまくし立てる。僕はいまいち状況が飲み込めなかったが、その勢いに押され本を受け取った。それは古い本だった。すでに数十年は経っているそんな感じがした。布製の装丁をされたそれは、何力所かすれて布が薄らいでいた。背にも表紙にもタイトルのないそれはいささか風変わりな気がした。僕が本の外装を見回している間も、委員長は話がしたいらしく口を開けたり、閉めたりを繰り返している。

「それ、前にいていた本ですよ」

しびれを切らした委員長は、一気にそういった。まるで宝物を見つけだしたかのような声だ。

「ほら、不登校気味な生徒の延滞本です。停電する直前に返しに来たんですよ」

「そうなんだ」

僕のあっさりとした返答にがっかりした委員長は、もういいですとばかりに本をひったくり、図書室に戻っていった。僕も仕事に戻ろう、そう思って振り向いた僕は、ある考えにいたって動きを止めた。

ソレナラ　カレハ　ナニヲ　シテイルノダ

主のいない机に僕はそう問いかけていた。

外はまだ嵐だった。

風が上の方で葉を揺らす。背の高い、名も知らぬ木は、緑の網から光の粒をこぼしていく。その光は地上に生えた草々を活気づかせた。

ささ。静かすぎる林の中で、草を踏むその小さな音は遠くにまで響いた。いや、そんな気がしただけかも知れない。小さな侵入者は息をひそめながら一点を見つめ、さながら木のように存在していた。その視線の先にあるのは、折れた細い若木。幹より伝い落ちる赤い流れ。突き刺された黒い影。こぼれ落ちる光の筋が、優しくその上に落ちる。その光景は神聖な十字架に、小さな影には思えてならなかった。

時の経過とともに聖は邪へうつろぎ、やがて元に戻る。

『聖』セイ

①知徳にすぐれ、広く物事に通じていること。

②汚れなく、尊いこと。

『邪』ジャ

①正しくなく、まちがっていること。

②有害であること。

ぱらり

紙をめくるその音だけが、湿った中で唯一の乾きであった。その湿った空気が漂う中に幻泡遊人はいた。朝、目が覚めたときのあの脱力感を覚えながら、彼は自分のいる場所を確認した。

その世界は黒であった。大きくも小さくもある。だが決して無限ではない。かといって無であるわけでもなかった。とにかく黒なのだ。三次元であろうが二次元であろうが、いや、四次元や一次元だったとしても、そこは黒であり、黒以外の何ものでもなかった。そんな黒の中で幻泡遊人は座っていた。

そう、座っていたのだ。公園でよく目にするあのベンチに。彼ははじめてそのことに気がついた。そして、自分が一人でないことにも気がついてしまった。『聖』、『邪』……と辞書のような文をぶつぶつとつぶやきながら隣人は、それにあわせるわけでもなく不規則にページをめくっていく。

「聖は邪にうつろいでいく。しかしそれ自体は何も変わらない。：：：：：では、なぜ変化しうるのか」

パラパラとページは無尽蔵にめくられていく。

「トナリニ イルノハ ダレダ」

突然の無機質な音に全てが停止した。幻泡遊人はひたすら沈黙していた。

(また一人になってしまった。あの人はどこにいるのだろう)

どこまでも白いページ。パラパラと再びめくられはじめる。

「ワタシは欠落者。自分を失った哀れな者。一アノ ヒトハ ドコニ イルノダロウーあの人？
あの人って誰ですか？」

隣に座っている者は、一人で会話を織りなしていく。幻泡遊人は完全にそいつを無視して殻に閉じこもっていた。

(隣にいるのは狂人なのだろうか？)

「キョウジン ナノダロウカ？ 一いえ、ワタシは狂人ではありません。欠落者です。失った自分を探しています。記憶のページをめくっていても、どこまでも白紙なのはワタシが欠落者たる証拠なのです」

(この欠落者は誰と話をしているんだろう。：：ああ、そんなことよりも影法師さんはどこに行ってしまったんだろうか。それとも僕がここに来てしまったんだろうか)

「ダレト イッタイ ハナシヲ シテイルノダロウ。一ワタシはあなたと話をしています。あなたの記憶の一部とワタシはこの空間で結ばれているのです。ワタシは記憶を探しています。欠落したそれを探しています」

(記憶を探しているなら『先』ではなく『前』に戻ればいいんだ。それはいつも後からついてくるのだから……過去に戻ればいいんだ)

先へ先へとめくられていたページはぴたっと止まり、目まぐるしく前に、過去のそれに逆走しはじめた。

「カコニ モドレバ イイダ。一ああ、そうかもしれません。過去に戻れば失ったものがわかるかもしれない。……ところで、あなたは過去に何を探しているのです？」

白紙のページは、前へ、前へ逆走するにつれて少しずつ白紙ではなくなっていく。

(探している？ 僕が？ 一体何を？)

「タイ何ヲ？ 一知らないんですか？ 自分のことなのに。偽った記憶の前にあったそれを探しているのでしょうか。あなたの記憶はそう告げています。だからあなたは過去に戻っているのでしょうか」

幻泡遊人は立ち上がった。まるでそれ以上知らされたくないかのように、その場から走り去っていく。

『影法師』カゲハウシ

影.....投影、不明.....

残された幻泡遊人の記憶も流れる空間にさらわれ、欠落者は欠落者へと再び戻っていく。
遠方でラッパの音が鳴った、気がした。

『忘却は精神安定剤である。夢もまた然り』

「先生、知っていますか」

朝、いつもより早めに着いた仕事場に、委員長はすでにて、開口一番そういつてきた。

昨日の嵐はだいぶおさまりかけていたが、それにしてもまだ風は強かった。この分だと授業があるかどうかも怪しかった。事実、来る途中で道路を塞ぐ様々なものを見た。そんな日にも、さほど家が近いわけでもないのに、委員長はようやく八時を過ぎたくらいの時刻に司書室にいた。

「昨日、友達とメールをしてたんですけど。あ、その子、中学の友達で、今は北高に通っているんです。その北高で変な噂があるそうなんですよ」

「噂？」

鞆をデスクに置くと、委員長が熱々のコーヒーを持ってきた。いつもと逆の展開に、少しとまどいながらそれを受け取る。委員長はたいして気にもとめずに、椅子をデスクの近くに引くと続きを早速話します。密会みたいだな、と思いながら、僕は適当に相づちを打った。北高で自殺した男子は本に呪われて死んだという、女の子らしいちょっと不思議な噂だった。が、その名前がでてきて僕は耳を疑った。

「え？ 今なんて言ったの」

「ですから、北高で噂になっている手に取ると必ず死ぬって本がですね。この間のこの本なんですよっ！」

自分の鞆から見覚えのある本を委員長は取り出す。昨日のうちに借りていたらしい。でも、僕が知りたいのはそんなことではなかった。

「そうじゃなくて。その本を書いたのが誰だって」

「中川十ですよ。以前うちの生徒だった。それはただのガセですけど。でも、最初に借りたのが彼女なんです。ほら」

用意していたらしく、委員長の手には図書カードが収まっている。その一番はじめの欄には、懐かしい文字が目に入った。

『中川十』

まだあの悲しい事件が起きる前の姉の文字に、僕は見入った。その間にも委員長は何かを一生懸命に話していたが、まるで耳に入ってこなかった。

そのうち先輩が来ると、まってきたと委員長は同じ話をしはじめる。僕は置き去りにされた図書カードを何気なく手に取ると、新しいカードを本に挟み、それはデスクの引き出しにしまった。

その日は梅雨の中でつかの間の太陽が顔を見せていた。葉の隙間から、幾重にも降り注ぐ光の筋。変わらな

い静けさは、やはりその場にいつものように存在していた。

「ねえ、話があるの」

少女でも女でもない、その中間のあいまいな声。

「まだ先のことなんだけど、こういうことって早めに話しておいた方がいいと思って……

。大事な話よ。あなたにも

関係があることなの。だから、ちゃんと聞いて欲しいのだけど。いい？」

声は一人で会話を成立させていた。

「わたしね。家を出ようと思っているの。卒業したら、あの家を出ていこうと思うの」

声は木々にこだました。羽音が遠くに飛んでいく。

返答はない。その代わりに、見上げた木から、不自然に木の皮が落ちてくる。しかし、彼女にはそれで十分

だった。その後に必要なのが孤独と沈黙であることを、理論的ではないにしろ、彼女たちは知っていた。それで

も彼女はやはりその後に関何か一言続けるべきだと思ったが、うまい言葉はそういうときに限って浮かんではこな

かった。

頭上にいるはずの相手は、木と一体化して、まるで気配がなかった。言葉をかける機会を失った彼女は、伸び

盛りを迎える草々を踏み倒して、ゆっくりとその場を後にした。

『もし 全てのことを

人間が 正確に覚えていたとしたら

きっと世界は

消えていたに違いない』

それを見たのは全くの偶然だった。

長く画面に向き合っていたから、一息入れようと軽く伸びをしたのがいけなかったのだ。

辛うじて行われた授業中にそれは降ってきた。

頭上から降る黒い影。それは中庭の幾つもあるものからそれを選んだ。

みるみるうちに影は落下し、それに突き刺さった。

悲鳴があがったかも知れない。最初から悲鳴はあったか？

今朝、用務員がさらに安全に補強した折れた若木は、落下物の重さに耐えきれず途中で折れた。制服に広がる赤いシミ。それは、あの日の再現のようだった。

「うわあああああ……」

椅子から落ちた僕は、頭を抱え、その場でわめき散らしていた。何がなんだかわからずにわめき散らす中、僕は姉が落ちた頭上にいたあの日の僕を見つけた。

『霧の中であって見えないものこそ、物事の核心である。そして、それは常に自らの側にあり、己自身で隠しているのだ』

そろそろ太陽が南中する時刻。厚く停滞した雲がその光を閉ざし、下界は薄暗く荒れていた。しかし、その荒れも次第に弱まりつつある。今あるのは、ほとんどその残滓に過ぎなかった。

風はまだやや強い。その中を僕はそれを見上げたまま突っ立っていた。目の前にあるのは折れた古木。雲を睨む先端は鋭く、獲物をその身に通すのを静かに待っている。ふと昨日の惨劇が浮かび上がり僕は、口元を押さえた。せり上がってくるものをやり過ごすと、慎重に呼吸をする。

引越した時から気に入っていた松の無惨な姿をもう一度見上げると、僕は家路につこうと踵を返した。

さすがに事件の翌日とあって、学校も臨時休校となったそう。学校は事故を目の当たりにしてしまった僕に、一日の休養をくれた。実際、僕にはそれが必要だった。

わめき声を聞き付けた教師が二人がかりで僕を取り押さえてくれた。幸いにも授業中だったので、生徒にその惨劇を見せずに下校させることができたらしい。昨日のことなのに、自分が何をしたのかいまいち記憶がない。警察に何かを言った気もするが、はっきりと覚えているのは先輩に自宅に連れられたときからだった。

(そういえば)

ふと脳裏に、今朝の新聞の見出しがよぎる。平静さを装うため、僕はなけなしの精神で日常を演じた。いつもの休日のように、遅めの朝食とともに新聞に目を通した。新聞はやめるべきだった。地元欄に大きく昨日の事件が載っていた。

『伝統校で飛び降り 事故か？自殺か？』

蘇った見出しに、犠牲者の名が浮かび上がる。それは見たことのある文字の羅列だった。そう、彼女はあの本を借りていた生徒だった。

(なんでクラスの生徒が亡くなったのに、先輩は僕を送ったんだろう。他にもやることはあっただろうに。確かに僕の家へは先輩しか呼んだ覚えはないが)

パーパー

クラクションが僕を思索から呼び戻す。風は止みかける気配を見せはじめていた。音の方に顔を向けると一台の車がのろのろと近寄り、すぐ隣で停車した。

「おう。そんなとこで何やってんだ」

車の中から見覚えのある顔が現れ、僕ものぞき込むようにかがみ込んだ。

「久しぶりだな。どうしたんだよ。何かこっちに用でもあったのか？」

久方ぶりに見た旧友の顔は、少し老け込んでいた。きっと彼も同じ感想を持ったに違いない。

「ああ、仕事でな」

「相変わらず忙しそうだな」

「おかげさまでね。そんなことより、どうだ一杯やりにいかないか。こんなところでぶらついてるんだ。暇なんだろう」

手で飲み干す仕草をして見せてくれるが、僕はわずかに苦笑しただけだった。この古い友人が酒を飲まないことを知っていたからだ。そのくせ彼は変質的なまでにコーヒーを愛していた。

気分転換にはもってこいの誘いだったが、僕は一応彼に尋ねた。

「仕事の方はいいのか」

「片づけてきたさ」

助手席に乗り込むとタイヤはゆっくりと動きだす。他に車が走っていないことをいいことに、Uターンして元来た道を車は走っていく。あの自然の檜は徐々に遠ざかり、いつの間にか消えていた。

いい店をみつけたんだ、そうって旧友は、県を越えた街の、その住人でさえ半分は知らないと思われる喫茶店に僕を連れていった。隣の県といっても隣接した街なので他県という感覚はさほどない。

黒ずんだ深みのある木造の外観を持ったその店は、時代の流れに置いていかれたかのようにひっそりと、あるいは自ら隔絶を望んでいるかのようにして住宅街の中に静かに佇んでいた。その店の前に来て、一瞬、僕はおじけづいた。友はそのことに気付かない様子で店の中へ入っていく。もうすでに後戻りは選択できなかった。少しのためらいと大半の嫌悪感をひた隠しにして、僕は彼に続いた。

この店を僕は知っていた。何せここは、あの時、僕たちが住んでいたあの場所と目と鼻の距離にあったからだ。

ぎぎい。いかにも古そうな音とともに薄暗い店内に足を入れる。その存在を長く知っていたが、実際に中に入るのはこれがはじめてだった。一度、姉が連れてきてくれたらしいが、僕は泣き疲れていてひどい顔で眠っていたそうだ。なぜ泣いたのかは記憶にない。いい思い出でないのは確かだろう。

先に入った友はカウンターに座して、すでに注文を済ませていた。

店内には僕たちと店の主人を抜かせば、客は一人しかいなく、彼は一番奥の、壁際のカウンター席に座り、熱心に何かの本を読んでいた。その人の席から二つ置いたところに僕は座った。バックに流れる静かなクラシックをどこかで聴きながら、僕たちはたわいもない話をした。一通りの話が終わったところで、隣に座る男は忌々しそうに一人の人物の名を吐き捨てた。彼らしくないその口調に僕はその名を聞き逃したが、だからといって聞き返す気にもなれなかった。

「知っているか？ あいつ、捕まったんだ」

一応問いかけにはなっていたが、僕の返答を聞く気はさらさらないとみえた。一向にそれでも僕は構わなかった。

「全くい気味だ。なあ、そう思わないか」

「誰のことを言っているんだい」

琥珀色の液体をのぞき込みながら、僕は聞いた。非難めいた視線があからさまに向けられたが、了解済みのことだったので、それで話が中断されることはなかった。

「あのメガネ委員の野郎さっ」

そういわれて、ああ、と思い出した。そんな奴も確かにいた。中学校時代の同級生だったはずだ。クラス委員を誰かがガラスィズ委員とやじってから、そいつの呼び名はメガネ委員となった。名前は忘れたが、とにかく嫌な奴だったのは覚えている。先生の前ではいい子ぶって、裏では嫌な奴をいじめていた。知能犯だったからそいつが怒られたことは一度もなかったはずだ。そういえば、メガネ委員の標的はおおかた隣に座るこの友達だったのではないだろうか。

「それで、なんで捕まったんだ」

その問いに過去の標的は、優越感を漂わせた笑みを口元だけに浮かべた。

「殺しちまったんだよ。いつかやるとは思ってたけどな」

驚くべきことなのだろう。だが、昨日の惨劇からすれば、僕にはその驚きすらなかった。全ては時期が悪いのだ。

「誰を？」

「奥さんと五歳の子供をさ。かわいそうに。発見されたのが三日も経ってからだってよ」

いつの間にか体は震えていた。頭のどこかにあの光景が蘇ってくる。落下する少女は時を逆さまにし、やがてはあの日の姉の姿となる。そして広がる霧雨の降るあの雑木林。

「……むし。虫は飛んでいた？」

訝しげな目で彼は僕を見ると、冷めかけたコーヒーをすすった。

「お前、まだこの時期になると駄目なのか」

「どう思う？」

「かなりおかしくなっているよ。昔以上にな。そういや、最近高校生の自殺が流行っているんだってな。お前のところは平気か？」

反論しようとして、触れられたくない話題を投げかけられ、その機会をなくした。苦痛の無言は、静かな店内には異質の電子音によって中断させられた。微かな舌打ちを漏らし、その持ち主は電話にでた。首筋に視線を感じ背後を見ると、迷惑そうに客は本から顔を上げてこちらを見ている。気まずい空気が辺りに立ちこめる。曲は素知らぬ顔で流れてゆく。

「悪い、呼び出された」

「忙しそうだな」

ああ、と答えると冷たくなったコーヒーを一気に飲み干し、彼は乱暴にカップを置いた。店主はわずかに顔色を変えたが、それもほんのわずかな間であった。

「あ、自分の分ぐらい払うよ」

旧友の手には一枚の紙幣が握られている。しかし、せわしない男はその行動さえ余分なように、僕を制した。

「気にすんな。誘ったのはこっちだからな。それよりも、悪いが送ってられないみたいなんだが、大丈夫か？」

「ああ、なんとかなるよ。気にするな」

「本当に悪いな。この埋め合わせはいつかするから。それじゃ、またな」

それだけの言葉を残して、慌ただしく旧友は去っていった。再び静けさが店内に戻る。

所在なさそうに座り直すと、無意識にため息が漏れた。この街に一人で取り残された憂鬱を、友は知らない。そもそも彼は僕がこの町で暮らしていたことさえも知らないのだ。小学校の数年を過ごしたそれだけの場所が、僕にとっては何ものにも変えられないほどの苦痛を帯びていた。そのことを知っているのは多分僕自身だけだ。母や別れた二番目の父が気がつくことなどないのだろうから。結局、自分のことを一番良く理解しているのは、自分自身なのだろう。それとも……………

「あの、もう一杯どうですか」

突然の声に我に返るとすでに殻だったカップから湯気が上がっていた。とまどう僕に「サービスですよ」と柔らかい笑みが答えた。

「すみません」

長居はしなくなかったが、しかたがないのでカップに口を付けた。

「ああ、そういえば見てくださいよ」

客は何を思い出したのか、ごそごとと壁際に置いてあった鞆から数枚の紙片を取りだし、テーブル越しに店主に差し出した。お孫さんですね、と相づちをうちながら、店主は写真をめくっていく。僕は何気なくその様子を眺めながら、味のわからない紅茶をすすっていた。その時、一枚の写真がソーサーの近くに落ちてきた。頭を下げる店主に、あいまいな笑みを浮かべ、僕はその写真を手にした。見るつもりもなく見てしまったその写真には、客とおしゃれをして花束を持つ

た女の子が写っていた。すんなり渡すはずの写真に僕は目を奪われた。客は何を勘違いしたのか、ピアノの発表会の写真だとうれしそうに語っている。

「ここってもしかして北高の」

僕の問いに客は嫌そうに顔をしかめたが、頷いた。

「何かあったんですか」

「いや、何。その写真を撮ったときに、近くで騒ぎがあってね。それも後で聞いた話だが、高校生が飛び降りたらしいんだ」

「へえ、そんなことが」

「隣の県のことだし、こっちじゃあんまりニュースにならないからね。そういや、その後も別の学校の子がやっぱり同じように飛び降りたらしいよ。なんでも二人はつきあってたとかって、娘がいったよ。：：ああ、孫の母親なんだけどね」

二人のそんな話を上の空で聞きながら、僕は驚きを隠すようにまた紅茶をすすった。客が会話をしながら、鞆にしまっている写真に写っていた知り合いを思いだした。

(偶然とはいえ、彼が写ってるなんて)

胸の内と一緒に、最後の一口を飲み干す。その仕草を見ていた店主は何を思い出したのか、懐かしそうに口元を緩めた。

「……懐かしいね。君の姉さんもよく紅茶を飲みに来てくれてたねえ」

かつん

陶器のふれあう音が大きくなった。耳を疑わずにはいられなかった。

(この人は、姉を、あのことを知っている)

不思議な痛みが体を走り抜けていく。そんな気がした。

「何度か君のことを聞かされたよ。……本当になんであんなことに」

「あの」

無理矢理、口を挟んでいた。曲は終わりに近づいている。

「この曲、ドビュッシーですか」

「え？ ああ、そうだよ。交響詩『海』だ。良くわかったね」

僕は敢えて沈黙した。店主もその意図を察してか、姉のことを口にしようとはしなかった。沈黙の中で曲は終わりを迎えた。そして——しばしの無声の後に、新たな曲がなりはじめる。それは、どこかで聞いたことのある旋律だった。

交響曲第九番ホ短調 作品九五「新世界より」

どこかから浮かんだ言葉を、無意識のうちに声にしていたらしい。

「へえ、これはそういう名前だったんだ」

客は感心したようにつぶやいた。

「この曲、好きなんですがね。ずっと新世界交響曲だと思っていましたよ。そういう名前なんです」

そう言うが、その言葉が誰に向けられているのかは定かではなかった。独り言というのが一番適切なのかもしれぬ。

「そういえば今日は何を読んでいるんですか」

店主の問いに、客は本の表紙を見せた。僕も好奇心からそれを見やる。

『影法師』

太文字で書かれたその言葉に僕は引きずり込まれた。

遠くの方で客の声がする。

「アンデルセン童話ですよ」

突如、その背後でラッパが鳴り響いた。

やけに高い電信柱の上に、影法師は座っていた。見下ろした世界は目まぐるしく変化している。常にかわり続ける世界。それでも彼にはこの世界のことを手に取るように理解できた。それは彼が、『影法師』であることの唯一の証明であった。

この世界の住人が全てそうであるように、彼も誰かの影であった。しかし、それは単なる影の域に収まらないものであった。彼は、影の主である誰かと、望んでもいないのに対等な関係にあった。つまり、影法師は影でありながら独立した一つの人格でもあったのだ。それ故に、不確定な世界を把握できたのである。

（影か。それは単なる内なる存在にすぎないのだろうか。まあ、いい。とにかく幻泡遊人は己の影に巡り会うことができたのだ。後は彼次第だ。自ら閉ざした過去に、その恐怖に立ち向かうかは本人にしか決められないことだからな）

そう自己に語る。

（それにしても恐怖とは何と曖昧なものか。人によってはあまりにくだらないことでも恐怖になってしまう本当の恐怖とはいったい何なのだろうね。それとも恐怖というのは影と同じで単なる隠れ蓑にしかすぎないのかな）

影法師は上を見た。自意識との境界線に集まる影の群で、ただ黒ばかりが見えるだけであった。

事実として、少年の姉は転落死であった。そこに居合わせた少年は不幸としかいえない。二人の秘密の場所である林の中の木から、彼女は転落し、折れた若木の鋭い幹にその身を突き刺した。それは悲しむべき事故であったが、それ以外の何ものでもなかった。

気がつくや、僕はあの林の入り口にいた。振り向けばあのころ住んでいた家が見下ろせる。今、あそこに住んでいるのは平凡で幸せな家族だろう。あの時のメンバーはもうここにはいない。二番目の父は母と別れた後、消息を絶ったし、母も新しい男とどこかで暮らしている。姉はもうこの世にはいない。あのころの面影など何一つあの家には残っていないのに、この林だけは変わらずにあの日のままであった。

薄暗い木々の中に足を向けた瞬間、異質な電子音が鳴り響いた。

「はい」

ディスプレイに表示された見知らぬ番号に、声が固くなる。電話の向こうの相手はそんなことにも気がつかないように甲高い声でまくし立てた。どこかで聞いたことのあるその声は委員長のものだった。

先月開かれた他校との図書委員会の時に、念のために携帯番号を交換したことが頭の片隅に浮かんできた。会合の後、すぐに番号を消した僕とは違い、彼女はまだそのままだっらしい。

「……先生、聞いてます？」

沈黙が続く僕の態度に不安になったのか委員長がそう聞いてくる。短く答えると息をつくのも惜しむように言葉が飛び出してくる。どうやら前に話していた北高の友人から新しい噂を聞いたらしい。

「……………にはストーカーがいたんじゃないかって噂なんですよ。……で、あの本を読んでいたら変な落書きを見つけて、もう誰かにこのことを伝えたかったんですけど、ほらうちでも……あ

んなことがありましたし、あんまりこういう話をするのはって……」

その声を上の空に聞き、適当に相づちを打ちながら、足はためらいがちに、林の中へと入っていく。一步、一步、草を踏み分けるごとに、消えた記憶は鮮明に蘇っていく。

『誰が引き金を引いたのか。いや、引いたのは僕自身だ。でも誰が僕にそうさせたのか。

目の前には若木に突き刺された人の姿。枝より伝い落ちる赤い液は、草と大地を染めていた。

それは死体だった。

僕は頭上を見た。背の高い木々が、空を捕まえようと勢いよく手を伸ばしている。

ひょろっとした木々は、そのままの姿勢のまま静止していた。

衝動殺人

不意に頭の中に言葉が湧き出た。

これは衝動殺人なのだろうか？一応自分に問いかけてみる。違う、それが答えだった。これは事故死だ。姉は

枝から滑り落ちたのだ。だが……衝動殺人とも見て取れなくなかった。僕たちはケンカをしていた。姉が家を出ると

いうのだ。それは僕への裏切りでもあった。一人だけあの家を出るなんて。

もしかしたら、かっとなって気付かないうちに突き落としてしまったのかもしれない。テレビで良くみるニュースの

ように。

奇妙な考えが浮かんでは消えていく。衝動殺人か事故死か。本当はどちらでも良かったのだ。その時、すでに

二つのどちらでも無いことを頭のどこかで僕は知っていたから。本当のところどちらも違うのだ。そのどちらかが

事実であっも、僕の中では真実ではない。

動かなくなった姉を目の前にして、僕は自分の平静さに苛立ちを感じた。悲しみがそこに姿を見せることはとうと

うなかった。きっとその情景に慣れすぎて、感覚がマヒしてしまったのだろう。

靴を覆い隠す草を踏み分け、僕は帰路についた。ものと化した姉は、すでに頭の隅に追いやられはじめていた』

ヒトは時として『現実』と『幻影』の区別がつかなくなる。自ら築き上げた『幻影』に溺れ、曖昧となった二つの境界を不可視なものに変えてしまうのだ。そうしておいて、ヒトは己の殻に閉じこもり、確定する前の混沌とした世界に堕ちていくのである。

だが時として、その不可視な境界の上に偽りの境界を作りだす者もいる。『現実』と『幻影』が混濁した中で、彼らは生きていくのだ。偽りの記憶や自己矛盾を抱えながら、彼らは周りとして変わらぬ様に暮らしていく。しかし多くの場合、本人はそのことに気付かない。なぜなら、混濁とした中で生きる者は同様の者に惹かれあい、単独となることが少ないからだ。小さな円の中で彼らはそれが普通であると思いこんでしまうのだ。また、気付いたとしても境界の修復は困難な状況にあることが多い。

「僕もその境界を不可視にしたために、ここに落ちてきたのですか」

手にした本を読み終えると、幻泡遊人はそう感想をもらした。水面から生え出た電信柱の上で

、影法師はゆらゆらと揺れている。

「これを読む限り、僕は最悪なケースみたいですね」

言葉は水面に円を刻み、水中に沈む。水面下には広大な宇宙が存在している。見上げれば、天井からぶら下がるあの目まぐるしい世界が見えただろう。

「みたいというのはどういうことだい」

「それは……」

答えは出そうと出ない。何とも曖昧な位置で立ち止まった。影法師は自分がいったことさえ忘れた風に世界の様子を見上げていた。幻泡遊人も口を閉ざしたまま世界を見る。それは実に奇妙な感覚であった。

「それはつまり、僕自身も知らずのうちに境界を不可視なものにして、その上に偽りの境界を作ってしまったからです。そしてこの地に落ちてきた。……僕の中のあの日の記憶は確かに偽られていた。それはさっきの映像でも明らかなこと。自己矛盾も確かにあった。僕はあの日のことを忘れようとする反面、思い出そうともしていた。……そうか！ 『追いかけても、答えが見つかるとは限らない』とはこのことだったのか」

呆気にとられた幻泡遊人は、ただ電信柱の上の影法師を見やるばかりであった。その影法師は、ふふん、と彼特有の笑いをするだけで何も言わない。その変わり、幻泡遊人の心の中に流れる言葉を拾い上げていくのであった。

「……だとしても、『境界』とはいったい何なんだ。いや、そんなことよりもこの人はなぜ僕に構うのだろう。僕以外にもここに堕ちた人はいるのに、どうして僕にだけ……。君は私のことを気にしているようだけど、私は単なる影さ。それ以上でも、以下でもない」

自嘲じみた笑いを影法師は見せた。ふと、幻泡遊人の脳裏に何かが浮かんで破裂した。

「『影法師』って、もしかしてアンデルセン童話のですか」

「さあ、どうだろうね。……それよりも、境界はたとえ不可視でもそこにあるのだ。だから『現実』と『幻影』が混濁することは決してないはずだ。目で見ようとするから、混濁したと錯覚するんだろう」

影法師の視線の先には彼に似た黒い靄の扉があった。

（そうか、あれが境界だったんだ）

『事実が「真実」になるとき、ヒトは常に逃げ道の確保を忘れない動物である』

「で、どうしようかなって思って、.....に連絡したんですけど、.....会う前に、先生にも伝えておこうって思って」

あの時のあの場所へ、僕は確実に近づいていた。すべてが時の流れにその姿を変貌させようとも、背の高いこの木々の群は何一つ変わることなく存在していた。いや、それはそうであって欲しいという単なる僕の願望による産物なのかもしれない。

のろのろと歩きながら、過去のその時へ、意識は巻き戻されていく。偽られた記憶はもはや崩れ去り、事実が鮮明に浮上してくる。耳に当てた携帯から聞こえてくる甲高い声を背景に、僕はひたすら自問自答を繰り返す。

(あれは事故死ではない。そうであって良いはずがないんだ)

頭上のざわめきはもはやあの日のものではなかった。

(だが、衝動殺人なんてものでもない)

ほんの短い間、足は停止した。あの日と同じ静寂が僕を包み込む。再び足が動きだすに併せて、頭の中も動きだす。

(そうだ。あれは衝動殺人ではない。僕は.....僕は何度も、そう、何度もあの光景をイメージしていたんだから)

自分が、今まで己に隠してきたことはそう言うことだったのだ。そして、それが真実であった。

(何度も.....頭の中で、ありとあらゆる方法で、実行はされなかったが、僕はあの死体をつくりあげていたんだ)

あの場所はすでに目と鼻の先であった。

(しかし、それは机上の空論。一種の欲望が生み出した妄想。そうではなかったのか？
僕に殺意はあったのか.....)

「.....あ、先生来たんで切りますね。そうそう、本なんですけど学校始まったら片づけるんで、棚に置かせてください。それじゃ、失礼します」

勝手に切れた携帯電話を、僕は無意識のうちに草むらに落とした。

あの日の自分自身へ、記憶は急速に巻き戻されていく。

『足は止まっていた。林の入り口に突っ立ったまま、よそよそしい自分の家を少年は見下ろしていた。』

(潜伏期間だったんだ)

衝撃から立ち直りはじめた意識が、ゆっくりと動きだしていく。

(殺意という病魔の潜伏期間だったんだ)

いつの間にか頭の片隅に押しやられた姉のあの姿がよぎった。気付かずうちに空想していた光景は、過程こそ

異なったが、結果として同種のものとなった。

(それだけでも、僕に罪はあるのだろう。.....あの人たちと、結局僕は同じだった)

少年の目に映る家は暗かった。

(だって僕は姉さんを)

ゆっくりと答えをたぐり寄せていく。自己弁護をしようという考えはどこにもなかった。

ただひたすらに真実を見つ

めようとしている。それ自体が着飾った弁明に少年には思えた。

(それはおいておくとして)

坂を少年は下りだす。一步一步、平生と変わらぬ足取りで。

(一体だれが、不安定な引き金を僕に引かせたんだ。……一体だれが?)

変わらぬ日常へ、みんながやっている見えないフリをして、少年は戻っていく』

(そうだったんだ)

真実はすでに目の前にあった。

(あの時、僕は、死とモノが同一だった。現実と幻影が同じだったんだ)

さらけ出された真実は、何にも増して痛かった。できることなら、そのまま放置しておきたかった。今となっては、全てが手遅れだ。

僕は、姉の死の真相よりも、それにより露呈した自らの狂った感覚を、自分を含め誰かに知られまいかと心配だったのだ。姉の死は、体の良い言い訳でしかなかった。

危なげな足に草が絡みつき、僕は草の中に沈んだ。霞んだ視界に、緑の中でちらつく携帯電話が印象深かった。

キット カノジョモ カレニ コロサレルノダロウ

今なら、あの日あの屋上に誰がいたのか、思い出せた。彼と僕は似ていたんだ。だから知らずにあの部屋で、小さな世界を作り、安心していた。

仰向けに寝ころぶと、葉の隙間から、日の光が静かに射し込んでくる。

何か笑いたい気分だった。

その日、念願だった梅雨があけた。

影法師は何事もなかったかのように、板塀に挟まれた道を歩んでいた。

幻泡遊人はすでに消滅していた。彼の名が指し示したように、彼はこの世界でははかない旅人でしかなかったのだ。影法師が、そのことを知っていて、そう名付けたのかは謎であったが。

「姉の死は彼にとっては、かもふらーじゅでしかなかったのさ。彼が最後まで恐怖を抱いていたのは、その死によって露呈した自分自身だったのだから」

誰に向かって吐かれたのか、言葉は目的地不明のまま、くるくると辺りを回ってどこかに行ってしまった。

地面から生えでた電灯に明かりが点りはじめる。徐々に夜が訪れる。

(「確か」という言葉はないのだから、朝が夜で、夜が朝であったとしてもおかしくはないな)

見上げた空は、刻々と闇に染まり、影法師は徐々に同化していく。その隣で、世界は目まぐるしく変わっていた。

了

引用は「国語辞典第三版 岩波書店」だったりする。